



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会報 第6号



編集・発行：東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2008年3月1日
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 TEL(022)795-7556 FAX(022)795-7583 E-MAIL <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

第7回同窓会総会と同窓会講演会の案内

第7回同窓会総会と同窓生による講演会を次の通り開催します。また、これに引き続き国際文化研究科平成19年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまには奮ってご参加くださいますようご案内いたします。

お誘いあわせて
多数ご来聴ください！

日時：2008年3月25日(火) 16時30分頃～
研究科学位記伝達式に引き続き開催します
(会員各位は16時からの学位記伝達式からご臨席下さい)
場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール
講師：ジョン・ヒョンジョン
(加齢医学研究所 PDF・言語生成論講座後期課程修了)
演題：「脳科学的アプローチによる第二言語習得研究」

第6回同窓会総会と同窓会講演会の報告

第6回同窓会総会を2007年3月27日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにおいて開催しました。総会に引き続いて熊本早苗氏による講演会を開催しました。

——会報第6号目次——

	(P)
1 第7回同窓会総会と講演会の案内	1
2 同窓会講演会の要旨 熊本 早苗	1
3 研究科主催公開国際交流プログラムの報告	
1 欧州連合——フランスからの視点	小林 文生 2
2 音楽に見るブルターニュの文化とその現代性	小林 文生 3
3 2008年アメリカ大統領選挙の行方	井川 真砂 3
4 次世代に残すアジアの文化と技術	葉 剛 4
4 第14回国際文化基礎講座の概要	4
18世紀文芸にみる異人像——日本・イギリス・ドイツを中心に——	
1 パイロンに見るオリент像	鈴木美津子 4
2 江戸時代における土語(トルコ)・波斯(ペルシャ)・亜非利加(アフリカ)のイメージ	藤田 緑 5
3 モーツァルトの『後宮からの逃走』に表れたトルコ人像	佐藤 研一 5
5 就職活動の報告 1 エントリーシートと面接	黒川 裕美 6
就職活動の報告 2 気楽に、マイペースに	杉村加奈子 6
6 韓国中央大学との合同研究発表会の報告	佐藤勢紀子 7
7 事務局より連絡	7

同窓会講演会要旨

「自他の文化理解を柱とした国際文化教育
～岩手県立大学盛岡短期大学部の場合～」

熊本 早苗
(岩手県立大学盛岡短期大学部講師・
アメリカ研究講座講義課程修了)

はじめに

久しぶりに母校を訪れ、多国籍で学際的な国際文化研究科の雰囲気に触れ、改めてここで出会えた諸先生方や先輩後輩への感謝の念を強くしております。特にアメリカ研究講座の先生方には、院生時代から助手時代までの間にも、非常に貴重なご指導を賜りました。研究科の先生方には、目指すべき研究者の姿や教育者としてのあるべき姿を教えていただいたと思っております。本日学位記授与式を拝見し、私も初心に戻る思いです。

学位に「国際文化」という名称がある私は、常に「国際文化とは何か？」を自問自答してきました。そして採用された勤務校では、国際文化教育というテーマで平成18年度文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム(通称、特色GP)に応募すべくワーキンググループを構成し始めた時期でした。そこで今回は、着任と同時に取組んできた勤務校の特色GPについてご報告いたします。

I. 取組の基本的考え方

平成18年度特色ある大学教育支援プログラムに東北地方の国公立短期大学部としては初採用された本取組の特色は、二つの柱から構成されています。第一に、文章や会話を正しく理解し、自らの言葉で考え表現できる日本語運用能力を中心とした能力(Personal Communication Skill, 以下 PCS)。第二に、英語運用能力や情報処理能力(Global Communication Skill, 以下 GCS)です。自らの言葉や生き方に立脚して、積極的に他者の文化を理解しようとする総合プログラムによる国際文化教育を目指しています。

II. 取組の特性

第一に海外研修による異文化体験は1年次に実施することに特色があります。1年生の段階で海外研修を取り入れることにより、異文化体験によって学生の学習に対する確かな動機付けを図り、その後の文化理解教育への確かな道筋を与えることができます。「国際文化理解演習」はアメリカ合衆国コースと韓国コースのいずれか1つを選択しますが、選択科目でありながら約8割の学生が参加し、事前研修や事後報告会・報告書作成など自らの異文化体験

を日本語や外国語で発表する機会を通じて、それぞれの関心を発展させることができます。

第二に、PCS 育成として各教員が連携して日本語運用能力の向上プログラムを設けています。「国際文化基礎演習」の科目を5クラスに分け、少人数クラスで学生主体の授業運営を実施しています。「日本語表現論」では、地元新聞への意見投稿を課題として導入し指導を強化したことにより、掲載率40%を実現しました。地方紙に自分の意見が採用されたことが学生にとっては大きな自信となり、その後の就職活動や編入学受験に効果的につながった例もありました。

第三に、GCS 育成として英語運用能力の向上を目指しています。TOEIC Bridge のテストによって習熟度別少人数クラスを編成し、さらに90分授業ではなく、45分授業を2回に分けて実施する時間割へと改善したことで、自主性の高まりと個人学習時間の増加が確認できました。また、ムードル社の e-Learning のプラットフォームを独自に活用することによって、教員は WEB 上で教材の提供や発展学習を実施しています。その結果、卒業研究やアメリカ研修後のレポートを英語で調査し執筆する学生も増加し、英語学習に対する意欲的な姿勢が見られました。

III. 取組の効果検証

こうした取組の効果検証は、TOEIC や異文化理解能力調査 (IDI) を入学時や卒業時、海外研修旅行の前後に実施することで、極め細やかにデータを検証しています。そ

の結果、学生の英語運用能力の飛躍が確認できました。短大入学時には同大4年制学部の平均点より下回っていた短大生が、1年後期から2年卒業年次にかけて同4年制学部の平均を大きく上回り、かつ卒業時には TOEIC で全国平均を上回るという結果が出ました。また、地元紙への投稿を契機に、地域振興に貢献していった学生もおります。地域の国際化に貢献しようと志す学生が増え、また現代的課題に応えようと在学時からボランティア活動に参加する学生も増えました。GP 事業に関する検証は今後も継続します。

おわりに

平成19年12月8日に、本学において特色 GP フォーラム「多文化共生社会において大学が果たすべき役割」を開催しました。当日は、定員200人に対して県内外の市民や学生など130人の参加がありました。各パネリスト間での議論からは、外国人住民を支援の対象ではなく、その固有の言葉と文化をもった人間であることを尊重して、日本人との共生を目指すことの意義が強調されました。そして「共生マインド」をもった人材の育成が大学の果たすべき役割の柱であることを確認しました。このフォーラムから私は、「多文化共生」は、障害やジェンダー、格差といった社会の諸問題を視点に入れて考えることも大切であることを学びました。今後、本学科では「多文化共生論」や「国際協力論」を新たに設置し、より地域に根ざした国際理解教育を実施する予定です。

新着情報 I 公開国際交流プログラムの報告

国際文化研究科では、平成19年度公開国際交流プログラムとして、以下にご報告するように公開講演会・シンポジウムを4件開催しました。このうち、(1)と(2)は東北大学創立百周年記念事業及び「2007 仙台におけるフランス・レンヌ年」参加事業として開催、(3)は国際文化研究科と在札幌米国総領事館ならびに札幌アメリカンセンターとの共催により開催、(4)は東北大学創立百周年記念事業として日本国際文化学会・仙台国際交流協会・朝日新聞仙台総局の後援を得て開催されました。

(1) 講演会 「欧州連合—フランスからの視点」 小林 文生 (国際交流委員会委員長・ヨーロッパ文化論講座教授)

2007年6月5日(火)、午後4時30分～6時、講演会「欧州連合 — フランスからの視点」を開催しました。これは、在日フランス大使館からのご提案を受けて、駐日フランス公使クリストフ・プノ氏を東北大学にお招きし、国際文化研究科の主催で行なった講演会です。

東北大学創立百周年記念事業という趣旨に鑑みて、開会に当たっては大西仁副学長よりご挨拶をいただき、また仙台市及び財団法人仙台国際交流協会や仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ、在仙台フランス名誉領事といった関係者の方々にもご来賓としてご参加いただきました。

折しもフランスでは、5月6日の投票で選出されたニコラ・サルコジ新大統領が、その第一声で「今夜、フランスはヨーロッパに戻ります」と宣言して、ヨーロッパにおけるフランスの新たな姿勢を表明したばかりですから、そのフランスを代表する重要人物の一人としてのプノ公使の講演は、たいへん時宜を得たものとなりました。

講演では、現在にいたる欧州連合の歴史的経緯を確認したうえで、制度、政治、経済の三つの側面から、欧州連

合がこれからの世界においていかに重要な位置を占め、いかなる役割を果たしていくか、また、そのための方法と課題は何であるかについて、具体例を挙げながら話されました。例えば、簡素化した欧州連合憲法というサルコジ大統領の提案、欧州連合加盟国の拡大(とくにトルコ問題)、通貨単位ユーロのあり方等、いくら時間があっても足りないほどの多岐にわたる豊かな内容でしたが、大使館から来ていただいた専門の通訳者の流暢な通訳のおかげで、限られた時間を十二分に生かした内容の濃い講演会となりました。

なるべく質疑応答に多くの時間を割きたいとのプノ公使のご希望に沿うように、答えきれぬほど多くの方からの質問があり、質問者一人ひとりに対する公使の真摯で熱のこもった応答は、そのまま講演の続きとなる充実した内容でした。学生、教職員のほか、高校生から80歳代の方までを含む幅広い年齢層の一般来場者も含めて、あわせて180名余の聴衆からの大きな拍手が鳴り止まず、名残を惜しみながらの閉会となりました。



Penot公使



Defrance先生

(2) 講演会 「音楽に見るブルターニュの文化とその現代性」

小林 文生 (国際交流委員会委員長・ヨーロッパ文化論講座教授)

2007年10月27日(土)、午後1時30分～4時30分、レンヌ第2大学教授のイヴ・ドゥフランス先生による講演会「音楽に見るブルターニュの文化とその現代性」を開催しました。民族音楽学を専門となされる先生は、フランス民族音楽学会会長でもいらっしゃり、ヨーロッパとくにフランスの伝統音楽の演奏の分析を通して社会の変化を探るという研究をしておられます。ケルト諸地域の音楽の専門家であると同時に、世界各地の伝統音楽についての研究も進めて、世界中を精力的に取材なさっており(マリ、モロッコ、インド、インドネシア、ヴェトナム、ブラジル、中国等)、2006年に初めて沖縄に取材に来られ、今回は2度目の来日となります。

講演では、もっぱらブルターニュの歌、器楽演奏、ダンスといった伝統音楽を題材として、それが、時代とともにどのように変遷してきたか、そしてその変化が何を意味して

いるのかについて、紹介されました。音楽の専門家であると同時に民族学者でもあるドゥフランス先生の該博な知識と独自の豊富な経験にもとづいて、現代のグローバリズムが音楽の世界にもみてとれるという興味深い話題も展開されました。

先生は、民族音楽に関する記録映画を30年来制作しておられ、今回はその貴重な多くの映像を見せていただきました。また、ご自身が声楽家でもいらっしゃるので、平均率音階とは異なる民族音楽の節回しを自ら歌って聞かせてくださり、私たちがふだん接する機会のない音楽を具体的に体験することができました。講演後の質疑応答も活発に行われ、とくに、アイデンティティに関する質問への応答で、「私たちは過去を変えることはできないが、未来を創造していくことができる」とおっしゃった言葉が印象深く心に響きました。

(3) 講演会 「2008年アメリカ大統領選挙の行方——そのメカニズムと焦点」

井川 真砂 (アメリカ研究講座教授)

2007年12月7日、在札幌米国総領事館ならびに札幌アメリカンセンターとの共催により、国際文化研究科は講演会「2008年アメリカ大統領選挙の行方——そのメカニズムと焦点」をマルチメディア教育研究棟6階大ホールで開催しました。講師にお迎えしたのは、ワシントンDCにある非政府組織(NGO)の新進気鋭のディレクター、マッシー・リッチ氏です。氏はプリンストン大学で政治学を修め、『ロサンジェルス・タイムズ』紙の記者を経て現職にあり、数多くの講演を行っています。当日は、石幡直樹研究科長とダーナ・ウェルトン領事による主催者挨拶に引きつづき、初来日というリッチ氏に登壇願いました。

本番までまだ1年以上もあるという早い時期から、アメリカ合衆国内ではすでに2008年大統領選挙戦が始まっており、その激しさにおいてもまた資金集めの多額さにおいても、この大統領選はかつてない選挙戦だといえます。それほどにもこの度の選挙にアメリカ人は関心を寄せているのです。どの候補者が勝利しても、変化はあるだろうと予測されています。しかしアメリカ人がどのような変化を求めているかまだ定かではありません。共和党のブッシュ現大統領の支持率は極めて悪いだけでなく二期目であるために立候補できませんし、現副大統領は立候補の意思を示したことさえありません。それゆえホワイトハウスが80年ぶりに現職以外の候補者に広く開放されたというわけです。イラク戦争も影響するでしょう。選挙本番で民主党のオバマ氏が勝利すれば、アメリカ合衆国の歴史始まって以来

の初の黒人大統領が誕生するのですし、ヒラリー・クリントン氏ならば初の女性大統領が誕生します。リッチ氏の講演は数多くのデータに基づく興味深い内容であり、その講演姿勢には好感が持てました。選挙民による直接選挙のメカニズムや、選挙資金の寄付行為者一覧がインターネットで閲覧できるというアメリカならではの驚くばかりの状況も知ることができ、また質疑応答もあって、有意義な機会になりました。講演内容に対するコメンテーターはアメリカ研究講座の小原豊志准教授が、司会は同じくアメリカ研究講座の井川真砂が担当しました。



井川真砂教授、小原豊志准教授、通訳の方、リッチ講師

2007年7月28日に東北大学大学院国際文化研究科の主催で、公開シンポジウム「次世代に残すアジアの文化と技術」を開催した。

今回の公開シンポジウムでは東北大学創立100周年を記念すると同時に、忘れかけられ、見過ごされている多くのアジア的な文化と技術をもう一度見直し、さらに深く掘り下げ、アジアのビジョンを切り開くという趣旨で、「次世代に残すアジアの文化と技術」に焦点を当てて議論を進めていた。

講演者は本研究科教授深澤百合子先生のほか、名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授、ランジャン・ムコパディヤーヤ先生(Ranjana MUKHOPADHYAYA)、千葉大学大学院工学研究科准教授、マーティン・モリス(Martin MORRIS)先生であり、それぞれが「家に入る時履物を脱ぐ文化」、「アジア共通の宗教文化としての仏教とその世界的展開」、「夏草に戻れる都市」について熱心に話をした。

仏教の発祥地たるインドで生まれたランジャン先生は、

仏教の伝播が現地の文化と信仰を根絶させたことなく、それと融合しかつ繁栄させていくという視点からインド仏教と日本仏教との交流に焦点を当てて講演した。イギリス・ケンブリッジ出身のマーティン先生は、鉄筋コンクリートや鉄骨によって造られた現代都市の建造物が果たして次世代に残すべきものであるかの疑問から建築の過去、現在、未来を語ってくださった。10数年もイギリス在住経験を有する深澤先生は、家に入る時に履物を脱ぐのは内外を区別する日本人的精神文化によるのか？それとも宗教的儀礼に基づくものなのかと問いかけて、古代の日本に遡り履物を脱ぐ本来の意味についての話を深めていった。

講演者の講演に対して、国際文化研究科教授山下博司先生、東北芸術工科大学建築環境デザイン学科教授松本年史先生、国際文化研究科教授北川誠一先生はそれぞれが専門家の立場から丁寧にコメントをされた。フロアからも沢山の質問が寄せられた。和やかな雰囲気の中で、講演者の先生、コメンテーターの先生は聴衆と対話し有益な交流が行われた。

新着情報Ⅱ 第14回公開講座「国際文化基礎講座」の報告

第14回国際文化基礎講座は「18世紀文芸にみる異人像——日本・イギリス・ドイツを中心に——」と題して平成19年11月に開催され、国際文化研究科の教員三名が日ごろの研究成果の一端を公開されました。その概要をご紹介します。

グローバル化が進行し、近代の袋小路に達した現代社会の状況を如実に表すものとして、中東問題が挙げられよう。18世紀は、キャプテン・クック(1728-79)やブーガンヴィル(1729-1811)やラ・ペルーズ(1741-88 頃)の世界周航等により、いわゆるテラ・インコグニタも消え去り、われわれ現代人の認識する世界が出現するに至った。本講座が、この近代の原点、「啓蒙の世紀」を考察の対象とするのは、現代の中東イメージの原型を探り出そうとするからにほかならない。当時の日欧の文芸に描かれたオリент・アフリカの異人像の考察を通して、現代社会の抱える諸問題の一端を照射し、「他者」を理解するよすがとしたいと思う。

第一回 「バイロンにみるオリент像」

鈴木 美津子 (言語応用論講座教授)

18世紀の精神風土を体現する詩人バイロン卿(1788-1824)は、友人の詩人トマス・ムア(1779-1852)に宛てた書簡において、出版市場を見渡した時テーマとしては「北も南も西もすべて使い古されてしまった」(1813年8月28日付け)が、東洋だけはまだ可能性が残されていると述べ、「東洋にしがみつこと」が肝要であると忠告している。バイロンは、自分自身の言葉に忠実に、トルコの太守を主人公とする『邪宗徒』(1813)、『アバドスの花嫁』(1813)、『海賊』(1814)などいわゆる「東洋もの」(Oriental tales, Turkish tales)を矢継ぎ早に発表し、大成功を収めた。

今回の公開講座では、当時のイギリス人にとっては東洋・オリентであったオスマン帝国支配下のギリシアを描写した旅行記風の物語詩『チャイルド・ハロルドの巡礼 第2巻』(1814)を取り上げ、当時の歴史的状況を視野に入れつつ、バイロンがいかにオリентを表象したのか、さらにはそのオリент像には、バイロンのいかなる政治意識が反映されているのかを検証した。

前半は講義資料集に則ってバイロンの簡単な生涯、19世紀初頭のイギリスの社会状況、政治状況などを紹介し

た。百聞は一見にしかずということで、バイロンが登場する映画『レディー・キャロライン・ラム』(1972)と『幻の城』(1988)の2本の中から、本講座のテーマに関係のある場面を取り出し、ビデオで鑑賞した。当時の風俗、時代の雰囲気などを受講者の皆さまに少しでも味わっていただきたいと思ったからである。しかし、ビデオ観賞に思わぬ時間がかかってしまい、前半部分で予定していたことを一部省略せざるを得なかった。前半の反省点である。

10分の休憩を挟んだ後半では、『チャイルド・ハロルドの巡礼 第2巻』の形式、構成、主題などを概観したあと、バイロンの宿敵でトーリー党の外交政策を体現している帝国主義者エルギン卿に対して批判、罵倒している部分、バイロンが残虐さ・冷酷さに奇妙な魅力を感じていたアルバニアの支配者アリ・パシャを描いている部分、オスマン帝国支配下のギリシアの衰退、過去の栄光などが描かれている部分を中心に具体的に作品を見てみた。バイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼 第2巻』におけるオリент表象は、彼の政治的立場、すなわちホイッグ党支持者としての域を出ていないということを確認し、さしあたっての本講座の結びとした。

江戸時代の260余年は、アフリカ大陸を舞台に展開された奴隷貿易の盛衰期とほぼ重なる。本講座で少なからぬ意味を持つオスマン朝の第二次ウィーン包囲は徳川綱吉の時代であり、モーツァルトの生まれた1756年は家重の、バイロンの生まれた1783年は家斉の時代にあたる。英国で奴隷貿易廃止法が成立したのは、ちょうど200年前の1807年、奴隷制そのものの廃止法案の議会通過は1833年だが、世界的に奴隷貿易が収束するのは19世紀後半になってからのこととなる。

モーツァルトの音楽も、バイロンの詩も、江戸時代の日本人には無縁であったが、彼らが取り上げたモチーフのひとつである「トルコ」や、トルコと隣接したペルシアに関しては、江戸の人々も決して無縁であったわけではない。鎖国が完成して間もない17世紀中葉の正保年間には、早くもトルコやペルシア、そしてアフリカの一部の地域に関する情報も、日本にもたらされていたのである。これは、前世紀のポルトガル人の日本漂着をきっかけに、日本で開花した初の「グローバリゼーション」の名残ともいえるべき知識を基礎としていたことは、その内容からも明らかである。

したがって、本講座では、日本に流入したトルコ、ペルシア、アフリカの情報の受容と変容を跡付ける意味もこめて、江戸時代以前の16世紀後半からスタートし、屏風絵・絵巻物から読本や輿地誌等の挿絵に至るまで、出来るだけ多くの図像資料を紹介しながら江戸時代における異人像の姿を追った。その際、安土桃山時代後期から江戸時代初期に作成された世界図屏風や万国図と、それらの原図と考えられるオルテリウス、ブラウ、マテオ・リッチ等の世界地図(『地球の舞台』、『世界図』、『坤輿万国全図』)との比較を通して、借用・移入の過程に光をあてた。視覚資料以外では、主として西川如見『増補華夷通商考』、寺島良安『和漢三才図絵』、新井白石『西洋記聞』、平賀源内『風流志道軒伝』、森島中良『紅毛雑話』、大槻玄沢『蘭説弁惑』を用いた。

これらに基づいて、一見、江戸時代においては最も疎遠と思われるが、西洋におけるオリエント、すなわち「中東」ならびにアフリカの知識や文物が、どのように、またどの程度紹介されていたのかを浮き彫りにし、江戸時代人の「他者」イメージと認識の一端を詳らかにした。

第三回 『モーツァルトの『後宮からの逃走』に表れたトルコ人像』

佐藤 研一 (言語システム論講座教授)

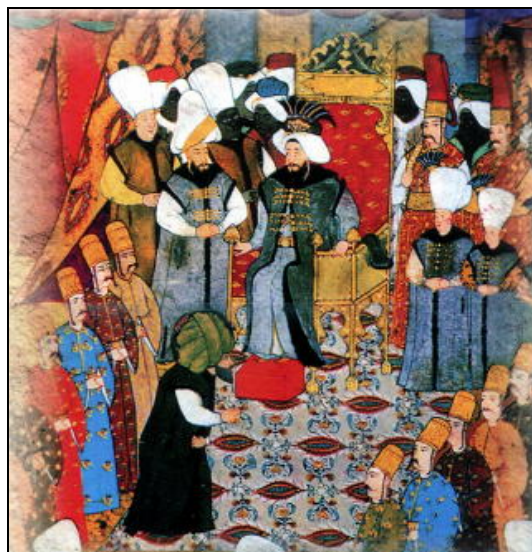
近世ヨーロッパにとって、イスラームの脅威とは、オスマン帝国のそれにほかならない。1453年、オスマン・トルコは、メフメト二世(在位1444-46、1451-81)の下、ビザンツ帝国千年の都コンスタンチノーブルを手中に収め、ルネサンス時代のヨーロッパに衝撃を与えた。さらにスレイマン大帝(在位1520-66)はドナウ川を北上、1521年にベオグラード、1526年にハンガリーと矢継ぎ早に侵攻し、ヨーロッパにおける地歩を固めた。そして3年後、ついにハブスブルクの帝都ウィーンを包囲するにおよび、宗教改革に揺らぐキリスト教世界を震撼させたのである。第二次ウィーン包囲は、その150余年後の1683年である。かくして、トルコ人は恐怖的となり、「野蛮人」と称されることとあいなった。いうまでもなく現実のオスマン朝は、東西交易の繁栄のうちに芸術や学問の大輪の花を咲かせていたのであるが。

本講座では、上掲の歴史的な文脈を踏まえながら、モーツァルト(1756-1791)の三幕物ドイツ語オペラ『後宮からの逃走』*Die Entführung aus dem Serail*(初演1782年、於ウィーン・ブルク劇場)にみるトルコ人像を浮き彫りにし、その斬新な文学的側面を読み解こうとした。

その際、近世ドイツ悲劇(1600年頃作)に、トルコ人の基本的イメージの源泉を探ることから始めた。かかる通俗的「野蛮人」像に変化が表れるには、これから150年余りも後、ヨーロッパじゅうで一世を風靡する「トルコものオペラ」を待たねばならない。このジャンルの芸術的頂点に立つのが、『後宮からの逃走』にほかならない。モーツァルトは、トルコの太守の描写に当たり、おぞましい「野蛮人」像のみならず、「トルコものオペラ」の紋切り型の善玉像からも脱皮して、人間的矛盾や膨らみを具えた人物像を造形

したのである。『啓蒙の世紀』の爛熟期、トルコの軍事的脅威も薄れた結果、ようやくトルコ人も血肉を具えた一人の人間とみなされ始めたといえよう。

なお、本講座では、DVD(2002年フィレンツェ5月音楽祭、於ペルゴラ劇場、指揮ズービン・メータ)を用いて舞台や音楽に触れ、このオペラに溢れる感覚的楽しさも味わった。



スルタン・アフメット3世(1720年)

就職活動の報告

平成 20 年 3 月に本研究科前期課程を修了し社会に巣立られるお二方より就職活動の体験談をお寄せいただきました。お一人はホテル業界、もうお一人は金融業界への就職が決定されています。在校生の皆さんに就職活動の参考にしていただければと思います。

(1) 「エントリーシートと面接」

黒川 裕美

(言語生成論講座前期課程修了)

私が就職活動をしていた 2008 年卒の新卒採用市場は売り手市場と言われていました。しかし内定を頂くまでの M1 の 12 月から M2 の 6 月まで、実際にたくさんの失敗や苦労を経験し、決して楽な就職活動とはいえませんでした。そこで以下では、内定までに経験したことや注意点などを「エントリーシート」と「面接」の 2 つの点から述べてみたいと思います。

①**エントリーシート**：エントリーシートに関して、私が感じた注意点は「大学院」で得た経験を書くということです。私は就活を始めた当初、サークルなどの学部生時代の経験を多く書いてしまいがちでした。しかし、ここに学部時代の経験ではなく大学院での経験を書くことで他の学部生との差別化をはかることができました。また自己分析を繰り返し行い、自分の性格や適性を十分に把握しておくことも必要です。例えば私の場合は、「自分歴」を作ったり、就職サイトで提供されている適性診断を受けたりするという自己分析の方法を行いました。自分歴とは、自分が印象に残っている出来事や感情を(学年ごとに)年表にして書き出していくものです。これらにより、自分の経験や行動指針と向き合い、自己アピールに繋げていくことができます。以上を踏まえ、大学院の研究や様々な経験の中から具体例を挙げ、それと自分の性格を関連付けて詳細に書くようにすると、印象深くて分かりやすいエントリーシートになると思います。

②**面接**：私は面接で、過度の緊張のために思ったことを伝えられなかったり、企業研究が不十分で志望動機を簡潔に述べられずに恥ずかしい思いをしたりなどという失敗がありました。これらの失敗を気に、面接前には志望する企業のホームページなどを見るなど必ず十分な準備をして臨むと同時に、志望動機を聞かれた際には自分が設定した「企業選びの基準」を明確に話すようにしました。また、緊張をしても笑顔で、面接官と「対話」する気持ちを持つことを心がけることで緊張を和らげていました。

さらに、面接時で最も注意すべき点としては、入社後のビジョンをより具体的に説明できるようにすることです。総合職や一般職の場合、企業が求めているのは知識ではなく経験のようなので、その企業の商品や将来性などに加え、「いかに自分の経験を生かせるか」ということを全面的に押し出して話すことが重要であると感じました。

最後に、就活中には辛いことが多いですが、常に前向きで次に生かしていく気持ちを忘れず取り組んでいけば必ず成功につながると思います。健闘をお祈りしています。

(2) 「気楽に、マイペースに」

杉村 加奈子

(言語コミュニケーション論講座前期課程修了)

私は就職活動を 1 月末から 5 月までしました。今年の春から金融関係の道に進みます。最初の内定は 4 月初めにいただきました。愛着のあるグローバルな企業でしたが、自分の希望と大きく異なるため、活動を 5 月まで続け、納得のいく結果を出すことができました。元々のんびりとした性格で楽観主義者なので、あまりガツガツと「就活のオニ」になることもなく、マイペースに活動できたことが、早めの内定をいただけた理由かもしれません。まずは自分を知り(自己分析など)、己のペースを把握し、アクションを起こすことが大切だと思います。就活中、私は次のことに気をつけていました。

①**決めつけない**：たくさんの業界、職種、企業があるけれど、イメージや氾濫する情報にいちいち惑わされないことが大事です。企業の情報を得ることは重要だけれど、それが本当か否かは実際入社してみなければわかりません。チャンスを逃さないために余計な先入観はなるべく持たない方がいいです。私はいつもニュートラルにすることを心掛け、様々なリクルーターと話す機会を持つことで、自分の道がより開けたと思います。「決めつけ」を無くすことで、選択肢も広がるし、自分の可能性を伸ばすことにもつながるでしょう。

②**気分転換を大事に**：就活中はどんなポジティブな人でも、落ち込む時があります。でも不安になるのは当然です。不安な気持ちになるからこそ、気分転換が大切になってきます。私は「就職活動」と「普段の生活」とのメリハリをくっきり付け、遊ぶ時は思い切り遊び、就活とは無関係の切り離した時間を作りました。上手に気晴らしをすることで、余裕が保て、ひどく落ち込むこともなく活動を続けることができました。就職活動に集中することはもちろん大切だけれども、就活一点に集中し過ぎるのも気が休まらないので、何事もほどほどに頑張るのがいいかもしれません。

こんな感じで、私は就職活動をしていましたが、要は、気楽に挑むことで、ゆとりも生まれ、活力も続くだろうということです。たぶん陽気でいても陰気でいても、就職活動することには変わりありません。ならば、陽気でいた方が、自分の将来を楽しく選択できるのではないかと思います。

就職活動は思い通りにならないこともあるとは思いますが、気楽にがんばってください。幸運を祈っています。

2008年1月11日(金)午後、マルチメディア教育研究棟6階大ホール(右)において、韓国中央大学大学院日語・日文学科BK21との共催による院生の研究発表会が行われた。

韓国中央大学からは、2006年、2007年に国際文化研究科主催の公開講演会で講演をいただいた朴鉦烈教授、任栄哲教授をはじめ、李在聖教授、林瓚洙教授の4名の教員と研究員1名、大学院生9名が来学、うち3名の院生が発表を行った。一方、本研究科からも3名の院生が出て研究発表を行った。発表会では、5時間にわたり、日本語や日本文化に関する様々な角度からの研究報告があり、熱心な質疑応答が繰り広げられた。他部局からの参加も含めて約70名の来聴者があり、一時は席が足りなくなるほどの盛会であった。

6名の発表者の氏名と発表題目は以下のとおり。

趙 容蘭	「茶道における侘びの一考察」
鄭 盛旭	「海外映画タイトルの韓・日比較-タイトル構成を中心に-」
朴 慧然	「海洋エキスポとしての麗水エキスポの一考察-歴代エキスポとの比較を中心に-」
(以上、中央大学大学院)	
樋口康一郎	「宮崎駿のアニメーション映画と日本文化-『千と千尋の神隠し』を中心に-」
久好 孝子	「指示対象の識別方略-日本語・韓国語・英語を中心に-」
宋 善花	「対称詞に関する日本語、朝鮮語、中国語の対照研究」
(以上、東北大学国際文化研究科)	

この研究交流行事は、2004年度から進められてきた中央大学と本研究科の研究交流の一環として行われたものである。今回の交流では、合同研究発表会の開催のほか、中央大学の方々に講座ゼミに招待したり、茶話会や懇親会、院生同士、教員同士の歓迎会を開催するなど、両校の構成員が親睦を深める場も多く設けられた。今後の交流協定締結、研究交流推進に向けての確かな一つのステップとなったと思われる。



上:発表に聞き入る聴衆

下:発表会を終えて



事務局より連絡

①同窓会メールマガジンについて

平成19年9月に同窓会メールマガジン創刊号を発行しました。事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思ひます。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。詳細については事務局までお問い合わせください。

②メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。国際文化研究科同窓会 <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

③同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。
<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/>

④同窓会懇親会を開催しました。

メールマガジンでご案内しましたように東北大学百周年記念行事に合わせて平成19年10月7日に同窓会懇親会を開催しました。事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑤会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生: 6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生:

編入学者: 8,000円

進学者: 6,000円

○上記以外の方(修生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口へ直接お納めください。

郵便振替口座名称: 国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号: 02220-5-66621

⑥ご意見・ご提案等!

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願ひます。お寄せいただいた個人情報には厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

(名称)

第1条 本会は、東北大学大学院国際文化研究科(以下「国際文化研究科」という。)同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の親睦を図り、国際文化研究科の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 会員名簿及び会報の発行
- (2) 講演会・シンポジウム・談話会等の開催
- (3) その他、必要と認められる事業

(事務局)

第4条 本会の事務局は東北大学大学院国際文化研究科内に置く。

(会員)

第5条 本会の会員は、正会員、学生会員及び特別会員とする。

- 2 正会員は、次のいずれかに該当する者とする。
 - (1) 国際文化研究科前期課程修了者
 - (2) 国際文化研究科後期課程修了者
 - (3) 前号に準ずる者
- 3 学生会員は、国際文化研究科に大学院生として在籍している者とする。なお、修了したときは正会員となるものとする。
- 4 特別会員は、次のいずれかに該当する者とする。
 - (1) 国際文化研究科の専任教官及び元教官
 - (2) 前項以外の者で、理事会の推薦により総会の承認を得た者

(役員及びその任務)

第6条 本会に、会長1名、副会長2名、理事若干名及び監事2名を置く。

- 2 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- 4 理事は、理事会に属する事項を処理し、会員の代表として本会の運営にあたる。
- 5 監事は、本会の会計を監査する。

(役員の選出)

第7条 会長は、東北大学大学院国際文化研究科長に委嘱する。

- 2 副会長は、正会員のうちから、会長が委嘱する。
- 3 理事は、会員のうちから、会長が委嘱する。
- 4 監事は、会員のうちから、会長が委嘱する。

(役員の任期)

第8条 副会長、理事及び監事の任期は2年とする。ただし、重任を妨げない。

- 2 補欠により選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 役員は、その任期が満了したときであっても、後任者が選任されるまでの間はその任務に留まるものとする。

(総会)

第9条 通常総会は、毎年1回、会長が召集し、本会の運営に関する重要事項を審議する。

- 2 会長または理事会が必要と認めたときは、臨時総会を開くことができる。
- 3 総会の議決は、出席者の過半数をもって決める。

(理事会)

第10条 理事会は、会長、副会長及び理事をもって構成し、会務の執行に関する必要事項を審議する。

(運営経費)

第11条 本会の運営経費は、入会金、会費、寄付金及びその他の収入をもって充てる。

- 2 特別な行事を開催するとき、または臨時に費用を必要とするときは、その都度理事会の議を経て臨時会費を徴収することができる。

(入会金及び会費)

第12条 学生会員は、入学時及び進学時に入会金及び会費を次のとおり納入するものとする。

- 2 入会金は、2,000円とし、初めて学生会員となったとき1回に限り納入する。
- 3 会費は、次のとおりとする。
 - (1) 国際文化研究科前期課程の学生 4,000円
 - (2) 国際文化研究科後期課程の学生 6,000円

(会計年度)

第13条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(支部)

第14条 会員が必要と認めたときは、支部を設けることができる。

- 2 支部に関する規約等は、当該支部で定め、速やかに理事会に届け出るものとする。

(会則の改正)

第15条 この会則の改正については、当分の間、理事会の承認を得て施行できるものとする。

- 2 前項の場合にあっては、改正後最初に開催される総会に報告し、承認を得なければならない。

(雑則)

第16条 この会則に定めるものの他、同窓会の運営に必要な事項は、理事会において定めることができる。

(付則)

- 1 本会則は平成14年11月29日より施行する。
- 2 平成14年度以前に入学または進学した学生会員の入会金は免除するものとし、残りの修学年数1年あたり2,000円の割で計算した額の会費を納めるものとする。